

第208回くらしの植物苑観察会 2016年7月23日(土)

- シーボルトが紹介した植物 -

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

海をわたった日本の植物とヨーロッパの園芸革命

たくさんの日本の植物を生きたままでヨーロッパに持ち帰り、ヨーロッパにおける園芸に革命を起こしたのがシーボルトであったと、『花の男 シーボルト』(文春新書)で強調されたのは大場秀章先生でした。シーボルトゆかりの地であるライデン大学附属植物園(ホルタス・ボタニクス)から、シーボルトがオランダに持ち帰った植物(樹木)のうちの6種が歴博に寄贈されたのを記念して開催された講演会でも、シーボルトがヨーロッパに持ち帰った日本の植物、シーボルトによるヨーロッパでの日本の植物の普及が園芸革命を起こしたことを紹介されました。シーボルトは世界で初めて植物の通信販売を始めたことなど、興味の尽きない話題が満載です。その中で、シーボルトが導入した日本の植物の代表格として掲げられたのは、アジサイ、レンギョウ、ツバキ、サザンカ、イタドリ、シキミ、コウヤマキ、キリ、ウメ、ユリ、ボタンです。ウメのように原産地が中国のものが含まれますが、日本にわたってから独自の花文化として開花したものだからです。なぜ、シーボルトがそれらに傾倒し、また、大場先生が取り上げられたのかを、実物をみながら考えてみることにしましょう。

さく葉標本、植物画、そして『日本植物誌(フローラ・ヤポニカ)』

シーボルトは江戸時代の後期に二度来日しています。最初の来日は1823年から1829年、すなわち文政6年から文政12年でした。その間に、多くの日本人と深いかかわりを持ちながら、日本の植物のさく葉標本を蓄え、また、植物画という資料を蓄積していきました。シーボルト自身が収集したさく葉標本と、日本の植物研究者が収集した膨大なさく葉標本をオランダに持ち帰りました。同時に、川原慶賀といった日本人絵師によって描かれた膨大な植物画(ボタニカル・アート)も持ち帰っているのです。それらが基礎になって、1835年に『日本植物誌(フローラ・ヤポニカ)』の刊行が始まりました。これはシーボルトとツッカーリーニの二人の偉業です。当時のヨーロッパはボタニカル・アートの最盛期でした。フランスではルドユテの『名花選』が2年前に完成、イギリスでもボタニカル・マガジンの盛期にあたっていたのです。『日本植物誌(フローラ・ヤポニカ)』の刊行は、日本の植物をヨーロッパに広める好機でもあったのです

.....
次回予告 第209回くらしの植物苑観察会 2016年8月27日(土)

「近代の朝顔ブーム」 仁田坂 英二 (九州大学大学院・講師)

10:00~12:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要